



上/安積疏水開削当時の十六橋水門
左/現在の十六橋水門
(いずれも提供:安積疏水土地改良区)



大規模な港湾建設計画が中止され、貴重な遺構が残っていた野蒜築港跡だが、2011年の東日本大震災によりその多くが流失・損壊してしまう。写真は1999年6月に撮影された野蒜築港の遺構(撮影:西山芳一)



(提供:安積疏水土地改良区)

地元で愛され 土の中で迎えた終戦

1931(昭和6)年10月に安積疏水関係者らが十六橋水門脇に功労者であるファン・ドールンの銅像を建立。太平洋戦争の時、軍事産業の資源として撤去回収されそうになったが恩人の銅像を砲弾にするのは忍びないと、安積疏水を管理する組合の常設委員が山の中に埋め隠したという。終戦を迎え、銅像は土の中から掘り起こされた。

「十六橋水門」から始まった。安積疏水の取水口の反対側にある日橋川の河床を盤下げすることで、猪苗代湖の水位を保ち、戸ノ口堰・布藤堰の日照りによる取水困難問題も解決している。ファン・ドールの役割は技術監修者であり、安積疏水の全体設計は内務省の南一郎平、詳細設計は山田寅吉(内務省勧農局)を中心とする日本人技術者たちの手で行われた。

一八八〇(明治十三年)年、全長八七・二坪、十六眼鏡石橋水門の木製角落とし構造である十六橋制水門が完成。続いて、導水トンネル、水路が建設された。延べ人工は八五万人、予算は当時の年間国家土木予算の約三分の一にあたる四〇万七、〇〇〇円という歴史的な大事業は、三年の工期を経て、一八八二(明治十五年)年十月に歓喜に満ちあふれた通水式を迎えた。日本初の国直轄の農業水利事業は、後の米どころ郡山につながる肥沃な土地を生み出した。

だがファン・ドールンは一八八〇(明治十三年)年に帰国し、安積疏水の完成を見届けていない。野蒜築港の事業計画にも携わっていたが、こちらは台風の影響を受けて計画が中止、「幻の築港」と呼ばれている。ファン・ドールンは日本人技術者に向けた指導書として「治水総論」「治水要目」「堤防略解」を残した。この頃には、古市公威のようにヨーロッパで土木工学を修めた技術者たちが帰国しており、お雇い外国人から日本人技術者へとバトンを渡す時期だったのかもしれない。



(出典:「郡山市史第4巻」)

安積開拓の父

コルネリス・ヨハネス・ファン・ドールン

不毛の地・安積原野に猪苗代湖の水利をもたらした安積疏水。日本初の国直轄の農業水利事業に、当時最新鋭だった技術者たちの力が集結した。

1837(天保8)年	オランダのヘルデランド州で生まれる
1872(明治5)年	明治政府の招聘により来日 土木局長工師に任命され、利根川、淀川、函館港などの改修・築港に参画する
1873(明治6)年	「治水総論」を著す
1878(明治11)年	猪苗代湖現地調査
1879(明治12)年	政府に疏水計画を提出、安積疏水開削工事開始
1880(明治13)年	オランダに帰国。日本政府から勲四等旭日小綬賞を贈られる 十六橋水門完成
1882(明治15)年	安積疏水通水式
1906(明治39)年	アムステルダム市内の自宅で死去、享年69歳

全国でも有数の米どころである福島県郡山市。その肥沃な土地は昔からあったわけではなく、人の手で生み出された賜物であった。

河川の治水に 日本初の科学的アプローチ

郡山市が位置する郡山盆地は、かつて安積原野と呼ばれ、水利の悪い不毛の土地だった。猪苗代湖からの導水によって安積原野を開拓するという壮大な計画は、江戸時代からの悲願であった。

一八七六(明治九年)年、安積開拓に従事していた中条政恒が内務卿(内務大臣)大久保利通に安積疏水と開墾計画を訴える。殖産興業論者だった大久保は、安積疏水を国営事業として進めようとした矢先に凶刃に倒れてしまうが、中条の陳情が実り、安積疏水は一八七九(明治十二年)に着工した。

この計画に土木技術者として貢献したのが、お雇い外国人のファン・ドールン。「安積疏水の父」と称えられ、猪苗代湖の十六橋畔には銅像が建てられている。

一八七二(明治五年)年二月、ファン・ドールンは土木寮(後の内務省土木局)から全国各地の港湾・河川の整備を行う長工師として月給五〇〇円で雇われ、来日する。オランダ出身で、国の技術官僚として鉄道建設や運河開削を手掛けてきた。日本での最初の任務は、利根川と江戸川の改修のための調査である。現在では当たり前前のことだが、河川の水位観測を日本で初めて科学的に行い、量水標を設置したのがファン・ドールンであった。

一八七五(明治八年)年に政府から大阪港の築造を依頼された際は、ヨハニス・デ・レーケらを母国オランダから招聘して、リーダー役を務めた。日本における治水の近代化を切り拓いたのはオランダ出身のお雇い外国人たちであった。監修の伊東孝氏は「河川改修の技術者を求めている明治政府にとって、鉄道士木が専門のファン・ドールンは、ミスマツチだったかも知れない。しかし己を知り、人を見る目はあった。最大の貢献は、現場を知っていたデ・レー

ケを引き連れてきたことにある」と、その意義を説明する。

東北開発七大プロジェクトの キーマン

一八七八(明治十一年)年、大久保は「一般殖産及華土族授産ノ儀ニ付伺」で、東北地方の七大プロジェクトを提言する。不平土族の救済と東北地方の開発を進めるためだ。安積疏水や、宮城県東松島市に計画された野蒜築港がこのプロジェクトに含まれていた。

安積疏水の建設工事は制水門



安積疏水全図(提供:安積疏水土地改良区)